

主の2016年12月11日  
第93号 クリスマス号

日本キリスト教団  
**泉ヶ丘教会**  
牧師 松永政和  
☎590-0114  
堺市南区槇塚台1-1-5  
TEL/FAX 072-291-9532  
メール izumigaoka9532church@yahoo.co.jp

■ 礼拝・集会 ■

- ・ 主日礼拝(日)午前10時30分
- ・ 教会学校(日)午前9時
- ・ 聖書を学び祈る会(木)午前10時30分
- ・ キリスト教入門講座・家庭集会
- ・ マリア会・テモテ会、他

■ 教会標語 ■

『キリストを証する教会』



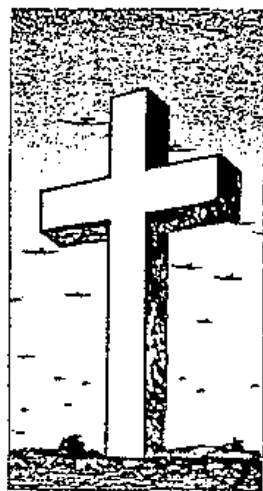
# クリスマスと洗礼

牧師 松永 政和



今年もクリスマス記念礼拝の中で一人の若者が洗礼の恵みにあずかります。その晴れがましい姿を前に、洗礼の恵みの中にある受洗者を前に、いつも思うのです。かつて洗礼を授けられた時の自分の姿をです。そして改めて、与えられました恵みに感謝し、信仰を持ち続けることの幸を思うのです。

れ、三日目に復活なさった。この復活の出来事と深くかかわっているのがバプテスマです。ですから記念的に言えば洗礼式はキリストの復活、イースターの日、よりふさわしく感じるのですが、なぜかイースターよりもクリスマスの日、に洗礼を受けられる人が多いようです。泉ヶ丘教会員五十名の内、クリスマスの日、に洗礼を授けられた人は二五名、半数におよびます。救い主イエス・キリストの誕生を自らの新生に掛ける気持ちからでしょうか。ではこのクリスマス、聖書はどれほど重要なこととして紹介しているでしょうか。新約聖書に載っています四つの福音書、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ福音書を見えますと、たとえば新約聖書一一二頁の内、イエス降誕に関



わる記事の記載。ページ数は、四福音書あわせて九頁です。マルコ福音書に至っては一行も降誕についての記事はありません。ヨハネ福音書は、イエスを「言」という抽象的な言葉でもって受肉(真に神が真に人となる)の出来事を短く紹介しています。

一方、イエスの十字架と復活については、どの福音書も丁寧に記しています。大雑把に言えば福音書の三〇パーセント、日にち的に言いますなら、イエスの地上での生涯を三二年としますと、そのうちの終わりの一週間余りの出来事に大方の紙数が割かれています。いかにイエス・キリストの十字架と復活が大事であるかが伺い知れます。そしてそのすべてが私たち人間にとって大事なことであるかということです。

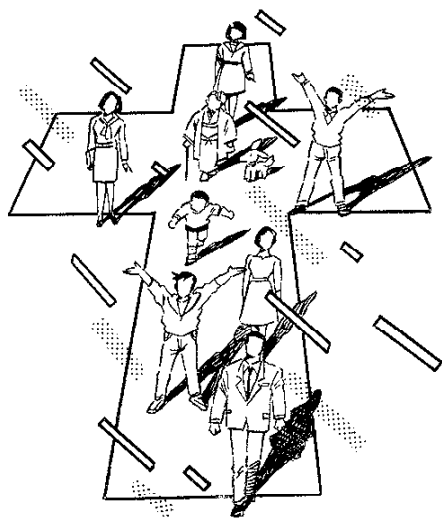
そうしますと、このようなことが考

えられます。聖書は信仰の書であって、歴史書ではないということとはご存知のとおりです。それならば、そのように聖書を読むことが大事ではないか。簡単に言えば、聖書の一頁目から時間を追って読むのではなく、聖書の出来事を逆から見ていくのです。「弟子たちが甦られたイエスに出会った」ところから始まります。そのためにイエスは復活されました。その復活は何からの復活か。それは死からです。ではその死は何によってもたらされたのか。十字架に架けられることによつてです。なぜイエスは十字架に架けられなければならなかったのか。私たちの身代わりになるためです。では私たちの何の身代わりか。私たちすべての人間が犯す神への罪です。このままではすべての人が滅びてしまう罪です。それを防ぐための身代わりです。御子イエスの決断です。なぜなら父である神は私たち人間を愛しておられます。罪のためには死ぬべき人を赦そうとなさるのは神の愛のゆえにです。しかし神が神のまま人間に代わることはできません。そこで神ご自身が、この地上に下り、まことに人として生き、人として罪を負うことを決意された。それを

具体的なものとして、特定の場所ユダヤで、特定の女性マリヤを母として嬰兒イエスとして誕生したのです。

こうして私たちはクリスマスを迎えるたびに、私たち人類の救いのご計画がはじめられたことを知り、十字架のイエス、復活のイエス・キリストによつて救いの約束が与えられたことを確信します。そして主を讃え、主を賛美いたします。

Ω





## 山口教会の聖夜

石田 和子

中央には達磨ストーブがパチパチと燃え、沢山の人達で汗ばむ程の教会堂。大きなクリスマスツリーには、赤や緑の球が光り輝いています。それらに照らされて皆の顔も笑顔で照り輝いています。

私の記憶では何故かそのクリスマス祝会は、夜に催されていたように思います。

昭和三十八年の聖夜です。

当時、私は小学校六年生、弟は四年生。

私達家族は父の赴任先の山口市で昭和三十五年からの四年間を過ごしました。西の京都と呼ばれる歴史の町。フランススコ・ザビエルがキリスト教を宣教し、ザビエルの二本の塔が町

のシンボルになっています。

転居の連続で精神的にも肉体的にもすっかり弱っていた母も、山口市の水が合ったのでしょうか、みるみる健康になり明るくなりました。その美しい町で、私達家族は山口教会に通いました。私と弟は教会学校に、早起きが辛く、しかし父には反抗できず、毎週欠かさず通いました。子供讃美歌の「♪こりたちは♪」のメロディーと共に先生方の子供向けにお話しされる聖

書の数が思い出されます。

この教会には多くの熱心な信者さんがおられました。我が家では、お正月に教会の方々をお招きすることが習わしで、皆様とは家族のような間柄でした。幼い私にも数人の方のことが印象深く思い出されます。

\* 山口大学の学生Sさん：両親を早くに亡くされ、家庭教師をしながら苦学されていました。私の父を慕い、我が家に頻繁に遊びに来られました。後に高校の数学教師になられました。

\* 山口大学法学部教授のN先生：特に苦学生の面倒をよく看られ、先生に伝道されて受洗された学生方が数名おられました。

\* 印刷工員のーさん：熱心な仏教徒であったーさんは、当時珍しくなかつた結核で寝たきりだったそうです。その枕元に毎日のように、牧師先生が訪ねられ、聖書のお話をされたとのこと。後に快方に向かわれ御家族全員で受洗されました。

その夜のクリスマスは老若男女、病める者も健やかなる者も、幸せな者も苦しみを負う者も、皆晴れやかに笑っ



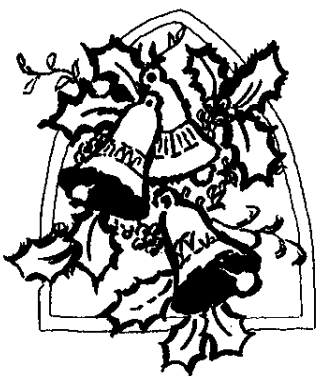
山口教会(ホームページより)

て、一様に心満たされていきました。私の傍には懐かしい父母が幸せな笑顔で座っておりました。あの聖夜を私は決して忘れることはないでしょう。そして今、私は思います。あの祝福に包まれた幸せな笑顔こそ、神様の御業であったのだということ、確信を持って。

『主があなたを祝福し、あなたを守られますように。』

主が御顔を向けてあなたを照らし、あなたに恵みを与えられますように。主が御顔をあなたに向けて

あなたに平安を賜うように。』  
 (民数記六、一四〜二六)  
 Ω



### 長崎を訪ねて

野々下 陽子

今からさかのぼる事460年余り、長崎を窓口にして日本にキリスト教が入って来ました。それまでに既に海外との交易に開かれていた長崎では、藩主が南蛮との貿易で利益を得る為に布教を認めたり、領主自身が信者となつてその土地に信仰が広がって行きました。が、今度はキリスト教に脅威を感じた為政者によるキリスト教の禁止令によつて、日本中にキリスト教師の追放、信徒への酷い迫害、弾圧が始まりました。長崎の各地で厳しい取り締まりが行われ、棄教を迫られ、牢に入れられ、処刑される悲惨な出来事が

多数起こり、その期間は250年を超えて長く続く事になりました。そしてやっと時が来て、再び自由に信仰を言い表せるようになった長崎の信仰者の人たち、その歴史を見聴きする旅をして来ました。



今回訪れたのは、平戸に始まり、生月島(いきつきじま)、そして五島列島の中通島(新上五島町)と福江島(五島市)でした。行く前に、昔読んだ遠藤周作の「沈黙」を読み返しました。長崎における江戸時代のキリスト教弾圧が描かれた読み物で、「現実にこのような事があった」という事を実際その地に行く前に少しでも記憶しておこうと思いました。しかし、あちこちの場面で自分に問いかけられる思いがし



て、読んでいてとても重たい気持ちになりました。

旅の始まり、長崎空港でツアー参加者が集合してバスで北上、平戸に向かいました。空港近くに天正遣欧少年使節の碑がありました。1582年、セミノリヨと呼ばれる神学校に学んだ13歳前後の4人の少年が大名の名代として選ばれ長崎の港を出発しローマ教皇に会って1590年帰国しました。帰国の2年前、豊臣秀吉によってバテレン追放令が出されていて、8年5ヶ月の命がけの長旅で広い世界を見て無事に故郷に帰ってきてみたら、キリスト教の情勢は暗転へと向かい始めてい



天正遣欧少年使節頭彰之像

た訳で、彼らの心は複雑だったでしょう。今回の旅で、天正遣欧少年使節団にまつわるエピソードが一つ。旅を一緒にしたご婦人が、この少年たちがローマに向かう途中で立ち寄ったスペインの王宮で食べたであろうというお菓子を再現して作って参加者皆に配ってくださいました。お菓子の名はマグダレーナ。知っている名前を連想させるような...そう、調べてみるとマグダラのマリアに由来するようです。フランス語ではマドレーヌ。食べてみると、今私たちが口にするマドレーヌよりちよつとさつぱり軽めのお菓子でした。初耳の話に興味津々、あとでそのご婦人のお話からスペインの修道院のお菓子を集めた本に載っている事がわかり、旅の最中でしたが、便利なネットを使い早速その本を注文してしまいました。家に帰ってから届いた本でレシピを見てみると、バターの代わりにオリブオイルを使って作るお菓子でした。お菓子も歴史を辿るととても面白い発見があります。カステラもスペインからポルトガルに渡って日本に伝えられたとか、興味深いです。

脱線した話を戻し、バスは2時間程で北の端近くの平戸大橋を渡って平戸

島に入りました。フランシスコ・ザビエルが入ってきたのが平戸です。ここにはポルトガル人やスペイン人、後にオランダ人、イギリス人も出入りしました。その後幾つかの港を経て、長崎出島へ外国船の寄港地が変更されて行きますが、宗教的な取り締まりを強めて行つた江戸幕府は1639年に鎖国令を出しました。外国人との混血児、日本人の母親はパタビア(ジャカルタ)に追放され、私たちが見学した平戸港に隣接するオランダ商館(当時の資料を元に2011年に復元された建物)の中には、異国の地から日本を恋しがる娘の手紙が展示されています。私たちは港の目と鼻の先にあるホテルに宿泊し、海に面した部屋からは、右手前方に「口」の字形に平戸港、正面は海を挟んで対岸小高い山の上に平戸城が見えました。朝の海を眺めながら、平戸が南蛮貿易に使われていた頃、西欧の船が行き来していたこの辺りの情景はどんなだったのだろうかと思いました。

長崎県の地図を眺めると、ずいぶん複雑な地形で海岸線が入り組み、多くの島々があります。平戸の西方にある生月島は、平戸島と橋で繋がっている

ので平戸からは車で40分程で行くことができず。歴史を学べる「島の館」では、江戸時代は捕鯨漁で大いに栄えたこと、そして島民の大部分がキリシタンだったので禁教時代には「沈黙」の小説で描かれたような過酷な出来事があり、教師がいない状況下で、納戸の中に自分たちの神を隠して、独特な信仰形態の信仰を守っていた潜伏キリシタンたちの事を教えてもらいました。そして初めて知った事ですが、現在もどのくらいの規模の存在かがはつきりわかっていないが、その形の信仰を守り続けている人たちがいるという事でした。

旅の後半は、いよいよ五島列島の島へ佐世保からフェリーで渡りました。佐世保湾から外海に出たら揺れるのでは、と思ったのですが波穏やかな2時間半の船旅で、中通島に着きました。しかし翌日、福江にフェリーで渡った時には、朝の便は風の為欠航した事を聞きました。五島列島の周囲の海は夏から秋は台風の影響を受け、冬は荒れるので、穏やかな時期は限られているのだそうです。五島の島は山が多く平地が少ない印象でした。土地が痩せていて農耕は難しく江戸時代の人々の



生活は貧しかったとのことでした。島で信仰を続けた人々は、山奥や、陸からは道がなく船でしか行けないような所で、役人の手から逃れて生活し何世代も教えが受け継がれていった訳です。1858年に長崎の港が開港されて外国人が増え、外国人の為の教会として長崎には1865年に大浦天主堂が出来て礼拝が始まった時、それに希望を託して隠れていた人々が出てきました。潜伏していた人たちは、外国との交流が再開されて大きな教会堂が建てられて行く様子を見ながら、きつと「世界は変わった、やっと表に出

られる」と胸躍る思いだったのではないかと思います。でもまだ幕府のキリスト教禁止は続いていた為、幕末と明治初めの時代の変わり目の不安定な時期も関係してか、長崎周辺では集団で捕えられ日本のあちこちの地域に流罪になって拷問を受けたり、五島では狭い牢屋にぎゅうぎゅう詰め足が地面に着かない程の人数が、食べ物もろくに与えられず、トイレも無い悲惨な状況で数カ月押し込められ、多くの犠牲者が出たと言っています。外国からの強い抗議を受けて1873年にやっと禁令が解かれたと知りました。鎖国が終わってからも20年間、キリスト信者の苦しみが続いていたのを初めて知ってとてもショックでした。流罪になつて酷い仕打ちを受けて生きて故郷に帰つて来られた人はその体験を「旅」と言つたそうです。五島で見て回つた教会は信仰が自由になつてから建てられ、其々の教会の礼拝堂のステンドグラスが柔らかく明るく温かくて、建築に携わつた人々の喜びが表れているように思いました。大曾教会のステンドグラスは桜の花がモチーフでした。近づいて見ると、花模様一つ一つが手彫りの木枠を使って作られていて、触つて

みて、百年前にこれを作った人が間近に感じられるよつでした。

平戸と五島列島、願いつつ遠い所にあつて、希望する内容のツアーに巡り合えなかつたりして数年過ぎて今回実現した旅、斎藤姉と数日間を一緒に過ごせて、初対面のツアーの方々とも多くの語らいが持ててとても恵みの時で感謝でした。実際に土地を歩いて、見て聞いて肌で感じることは強烈です。ちよつと今教会で学んでいる申命記の31章に、モーセが全イスラエルの民に「あなたの神、主は、あなたと共に歩まれることもない。」と語り、祭司、長老たちに向かつて、書き記した律法を民に読み聞かせ続けるように指導する場面があります。数千年前の出来事として記されていますが、江戸時代のあの人々に、そして現在も私たちに御言葉は語り続けられています。そして聞いた御言葉を自分に語られたと受け止めて信じる人は、どの時代にあつても希望に生きる事が出来るのだと、改めて強く感じました。

参考資料

- ・旅する長崎学6 キリシタン文化 別冊総集編 企画長崎県 制作長

崎文献社(本)

・五島キリシタン史 五島市世界遺産登録推進協議会発行(web)

Ω



キリシタンの旅

斎藤 一実

念願だつた平戸、五島に野々下姉と共に行きました。

皆さん、ご存知のこととは思いますが、日本にキリスト教を伝えたフニンシスコ・ザビエルが長崎・平戸の地を踏んだのが1550年。教えは瞬く間に広がり、特に九州を中心に、キリスト教は盛えます。

しかし栄光も束の間、1614年徳川幕府が発したキリシタン禁教令を境に、キ

リスト教は一転、弾圧の嵐にさらされます。宣教師たちは追放され、信者たちは棄教を迫られ、処刑が横行されました。その中に命を捨ててまでも、信仰を守ってきた信者さんがいました。隠れたところで信仰を守り続け、わずかに命を残された信者たちがいました。

生月島博物館には、その当時の潜伏キリシタンの民家が復元されていました。手前の部屋には日本のやおよすの神棚やお札が置かれています。奥の狭くて暗い部屋には観音像をマリアに見立てたものやメダイが置かれていました。表向きはやおよすの神を信仰していると見せかけ、密かに隠れながらお祈りをしていたのです。身を守るために踏み絵に応じ、家に帰ってから神様に罪の許しを乞うたと言われています。

余談ですが、私はこの手前の部屋を見て、私の祖父の家も以前はこんな風だつたのだと思いました。キリスト教に出会うまでは、やおよすの神を信じ、朝に晩に家の中のあちこちに飾られた鏡や紙を拜んでいたと伝え聞いています。しかし宣教師からイエス・キリストのことを聞き、祖母はやおよすの神を風呂敷きに



包んで川に捨てに行きました。父は学校で天皇陛下を拝むよう強要されたそうですが、決して頭を下げなかったといひます。

キリスト教が日本に入ってきたことにより、やおよぶの神を拜んでいた日本と天地万物を創造された唯一の神を信じる西洋と激しくぶつかったと言われます。お上から「お前はキリストを信じるのか、信じないのか、どっちだ」との問いを突きつけられ、決断が迫られるのです。信者たちは苦渋の決断をして、信仰を守ってきました。そして、神様と密接につながっていたからこそ、殉教の道をとることもあったのです。今の私たちは、どつなのでしょう。信じるのも信じないのも人の自由、という風潮の社会の中で生きています。ある時は神様を信じ、ある時は他のものを大事にしても、私の自由なのだからと、自由を勘違いしてしまっています。信仰に生きるとは、本当は簡単なことではないのでしょう。

1873年明治政府は外交上の観点から禁教令を撤廃します。信者たちはどれだけ嬉しかったことでしょう。天に昇るよ

うな気持ちだったことでしょう。ようやく信仰の自由を得た信者たちは、貧しい暮らしの中から資金を出し、労働奉仕で教会堂を建設していきます。いま五島に残る教会はそんな信徒たちの血と汗の結晶なのです。



例えば『頭ヶ島教会』は石造りの教会堂ですが、信者たち自らが建設に携わったそうです。夜は生活のために漁に出て、昼間は対岸の島から砂岩を切り出しては、ひとつひとつ船で運び、自分たちで積みあげたそうです。素朴ですが、重厚な外観です。内部は木造で、天井や壁面に白い花があしらわれ、優しい雰囲気です。

『青砂ヶ浦教会』は赤い煉瓦造りです

が、この煉瓦も信者たちが男女問わず船から小高い丘まで運び上げて作られたそうです。内部は木造で、天井は高いリブ・ヴォールト(くもり)構造で、窓には木を組んだ枠に綺麗なステンドグラスがはめこめられています。スチンドグラスは可愛いお花で、ぬくもりが感じられます。信者たちの思いが凝縮されているようです。どの教会も玄関にお掃除当番表が貼っており、信者の方がお掃除されているようでした。ある教会を訪れた時、ちょうど老婦人さんがお掃除されていました。物腰の柔らかい方で、教会を大事にする姿が見受けられました。大曾教会では、玄関に「来訪記念にお持ち帰りください」と小さな力





ードに聖句やマザーテレサの祈りの言葉を手書きで書いたカードが置かれています。訪れた人にキリストを伝えたいという宣教とおもてなしの心を感じました。教会は、礼拝の場所であり、宣教の場所である事、一人一人の信者の信仰によって成り立っている事を感じました。

今回の旅行を通し、日本にキリスト教が伝わった頃の歴史を学びました。過酷な自然の中で生き、厳しい取り締まりにさらされながら、信仰を守り続けた信者さん。神様につながりひっそりと生き続けてきた信者さん。信仰とたたかってくれた先輩たちがいたからこそ、日本にキリスト教が伝わり、私たちもキリストと出会えたことに感謝です。

追記です。来年1月、遠藤周作原作「沈黙サイレンス」の映画が公開されます。見に行かれませんか？



### スロバキアの

### 木造教会群とクリスマス

中山 アイ子

「カルパチア山脈地域のスロバキア側の木造教会群」を訪ねました。

スロバキアの東部からウクライナの西部にかけて広がるカルパチア山脈には、まだ広く深い原生林が残っています。

カルパチア山麓は、多くの豊かな文化とそこに住む人々を育んできました。

この一帯は木造教会群と木造建築の宝庫です。自然が与える恵みや気候を、生活に合わせ、地形に則したかたちで、木造教会が建てられていて、この佇まいは遠い昔から変わることなく

続いてきました。

2つのカトリック教会、3つのプロテスタント教会、3つのギリシャ正教会の8教会群が2008年に、世界遺産に登録されました。

ラテン文化とビザンティン文化、またスラブ人の建築様式が融合した宗教建築で、二つの村に、一つの教会があり、宗派ごとに異なる信仰を持つ人たちが、争うことなく、教会を守ってきました。豊かな地方の伝統文化の証です。



建築様式の珍しさや、技術の素晴らしさともう一つ、実際に人々がそこに住み、生活しながら、教会を守っていることが、世界遺産に登録されるための大切な条件です。

ロマネスク教会やゴシック教会に比べると、木造教会には派手さはありませんが、渋い味わいがあり、内的な宗教性を感じさせられます。ここで祈りを捧げる人々の、質素で簡素な生活ぶりが覗え、謙虚な信仰心が伝わってくるようでした。

一定の距離を保って、村ごとに離れた位置に教会が建てられていますので、訪ねるには、交通の便が悪く、時間がかかりました。

ヘルヴァトフ村の「聖フランチェスコ



教会」は、トルコ軍から村を守り救って下さった神さまに、感謝して、1500年に建てられました。ローマ・カソリック系の教会です。鉄釘を使わずに建てられた、スロバキア最古の教会とも言われています。教会内部の木の壁や天井には、びっしりと宗教画が描かれています。

「アダムとイブ」や「最後の晩餐」などの聖書の話が、テンペラ画で描かれています。壁画は17世紀に描かれたそうです。

13世紀頃から、ハンガリーとポーランドの中継地でもあり、交易で栄えたバルデヨフの街は、古くからさまざまな民族や宗教が共存し、東西のキリスト教文化の交差点のようでした。まるで中世に、タイムスリップしたような街並みが残る美しい街です。このバルデヨフの街から、近郊のラドミロバ村に移築された「大天使ミカエル教会」は、東のギリシャ正教と西のカソリック教会が融合して出来ました。現在はギリシャ正教が教会を守っています。

この教会は、管理も村人たちにまか



されていて、村人のおばさんが教会の鍵を開けて下さり、イコノスタシスをゆつくりと心ゆくまで見せてくださいました。イコノスタシスは、目に見える世界と目に見えない世界を隔てる壁で、イコンで覆われています。どうしても、こんな素晴らしいイコノスタシス（聖障壁）がこの教会にあるのが驚きでした。長い歴史が秘められているようです。

スロバキアの中央部の山岳地帯、ニースケー・タトラ山の標高1000mを越える山々の中腹にある集落にも行きました。

細い急な山道を、1時間ほど登っていくと、ヴルコリニエツという小さな村があり、山の中にひっそり佇んでい





ます。温かみ溢れた木彫りの「聖家族」が村の入り口で、迎えてくれていて、素朴な信仰が伝わってきました。長い間、孤立して住むスラブ民族の、伝統的な木造家屋がそのまま保存されています。

石を積んだ土台に丸太を組み、その上に板葺きの屋根をつけた、平屋建ての家屋は、青、ピンク、黄色などに塗られ、絵のような小さな村です。実際に人々が孤立しながら生活す

る村落として、世界遺産に登録されましたのは、2011年のことで、この年には「白川郷・五箇山の合掌造り集落」も世界遺産に登録されています。現在、45軒、30人が住む最も小さな世界遺産です。

「ブルコ」とは、スラブ語で狼を意味し、狼を仕留める猟師たちの村として昔から知られていました。春から秋まで、家畜の世話と狩猟や農作業をしながら、忙しい毎日を過ごしますが、家に引きこもる長くて厳しい冬が、村人にとって唯一の安息の季節だそうです。

冬になると集落は雪に覆われ、孤立するなか、ほのぼのとしたローソクの灯火のやさしい光で夜を過ごします。

壁に開けられた小さな穴は、煙出し用というよりは、明かり取りのためのものだとか。暖炉やオーブンの煙によつていぶされ、耐久性が増すように工夫されていました。

マキを燃やして暖を取り、キャンドルを灯して静かに過ごす時間は、信仰に癒される、平安の恵みです。現代人が忘れつつある神さまと向き合う空間を思いました。



村の唯一の教会「聖母教会」(ローマ・カソリック)は、村人たちにとつて、大切な心のよりどころです。

厳しい環境に囲まれた生活だからこそ、神さまへの忠誠と、隣人への愛に貫かれた生き方が守られていると思えました。教会のミサには、雪深い山道を登つて、近隣の村からも、人々が集つてこられ、心温まるクリスマスを待ち望み、祝います。

「いと高き所に、栄光が、神にあるように」  
地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように。」

ルカ2:14  
クリスマスおめでとうございます。

Ω



## サンタさんって誰なの？

村田 幸子

今年も1年が過ぎ、クリスマスがやってきました。アドヴェントを迎えると、私の心は不思議なくらい落ちてきてきます。それは十字架に架かられて私たちの身代わりとなつて天に昇られたイエス様を思うからです。深い感謝でいっぱいになるクリスマスです。イエス様は、今日お生まれになりました。

私たちは、イエス様のお誕生をお祝いして、十字架を憶えて感謝の礼拝に与かります。

私は、泉北ニュータウンで、児童合唱団の指導に携わってきています。いろいろなコンサートに参加したり主催し

たりしています。その中で最も大切にしているコンサートは、クリスマスの頃に行くコンサートです。このコンサートは、年に一度の一番大きなコンサート、定期演奏会です。今年も12月23日に開催します。

もちろん1年間練習をしてきた曲の中から、歌います。そして副題はクリスマスコンサートです。このための選曲、今年は讃美歌を選びました。指導をしながらクリスマスの本当の意味を教え続けて本番を迎えます。子供たちの大好きな「サンタがまちにやってくる」を歌うとき、「子供達にはサンタさんは、誰？」という質問をします。子供たちは必ず「お父さん」とか「おじいちゃん」とか答えます。でも私は、「イエス様かもしれないよ」と言います。サンタさんもイエス様もクリスマスになるとみんなのところへやってきます。そして素晴らしいプレゼントを持ってきてくださるのです。しかも分け隔てなく、みんなにです。こんなサンタさん、そしてイエス様に感謝をしてこの1年間を過ごしてほしいものです。そして神様に感謝することによって、自分たちの親への感謝も忘れないことが大切だと、子供たちに教えて行

きます。クリスマスは、何の意味もなしに、ただプレゼントをもらってケーキを食べて、過ごす日ではないということ、子供たちは覚えてほしいと思います、私は合唱団の指導の場を、伝道の場としてまだこれからも、指導し活動し続けて行きます。

乾ききつた人の心に、合唱を通して潤いを与え、そしてその中でイエス様のみ言葉を伝えることのできる幸せがあることに、感謝をするクリスマスに与らせていただきます。私は歌います、

“Then sings my soul my Savior God to Thee,  
How Great Thou Art, How Great Thou Art!”

Merry Christmas ! Amen

Ω







## ドイツからの クリスマスカード

長澤 真理

今年もドイツからクリスマスカードが届いた。早々にくれたのは友人のお父さん。数年前から日本語版の「Losungen（\*）を同封してある。「こちらでも買えます。」とは書いてある、毎年頂いている。

お父さんは1932年ヒットラーが政権をとった年に旧東ドイツで生まれ、ドレスデンの大学を出て弁理士になったが、熱心なクリスチャンの故に東ドイツ時代は様々な不利益を受けた。長老として礼拝説教を担当することもあり、「伝道した」という事で捕らえられたこともある。なのでクリスマス

カードもありきたりの文だけでなく、メッセージが書かれている。どこまで私は理解できているか疑問だが、一部紹介したい。

「\*」は、再びクリスマスが来ようとしています。この祭日の準備で我々の国では人々は忙しく駆け回っています。はつきり言っていてそれは物資的なもので、霊的な思いは少ししか感じられません。だから、人は待降節についてもあまり語らないのかもしれない。それはともかく、私達は、飼いや葉桶やモミの木の周りに家族が集まるクリスマスを楽しみに待っています。でも私たちは、キリストの再臨と神の素晴らしい栄光をもっと多く待ち望んでいます。これに関連して待降節にはエリミヤ23:5-8の言葉が非常に重要です。5節はイエスの誕生を示し、8節は聖なる国にユダヤ人を集めることについてかかれています。二つのできごとは、2000年の間、互いに離れています。共に神のご計画に属しています。「\*」では、ロマ書11:33が有効です。」

しばらくドイツに行けてないが、静かで暖かなクリスマスの光景は今も心に残っている。お互いを思いやっている

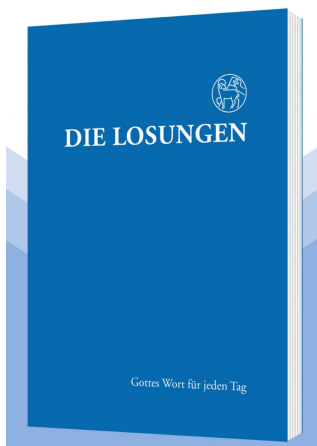
のを強く感じたいし、家族のいない人や旅人にも共にクリスマスの喜びを与えてくれた。  
Ω

（\*注）LOSUNGEN（日々の聖句）

LOSUNGEN（ローズンゲン）とは、ドイツ語で「くじ」の意味で、1730年から続いています。旧約、新約聖書からくじでその日の聖書箇所が選ばれます。短い聖句はくじで選ばれています。短いが、不思議とその時に必要とされる言葉であることが多く、慰めになったり、勇気を与えてくれたり、思索するきっかけとなったりするものです。（ネットの解説から）

LOSUNGEN 2016 日本語版より  
12月7日の聖句

「主の慈しみは決して絶えない。」  
旧約聖書 哀歌3章22節





クリスマスの  
恵みにに寄せて

堺教会長老 油谷 和重

泉ヶ丘教会の皆様、クリスマスおめでとうございます。  
いつも堺教会を覚えてくださり、まことにありがとうございます。  
私は堺教会の油谷和重と申します。簡単に自己紹介させていただきます。私は、両親に連れられて幼いころから堺教会に通い、以来、社会人になるまでずっと堺教会で育ちました。仕事の関係で名古屋および東京で合わせて二年間生活しましたが、それぞれ素晴らしい教会を紹介していただき、礼拝生活を続けることができました。大阪には今から二年前に戻って参りました。堺教会では、長老、教会学校（の）



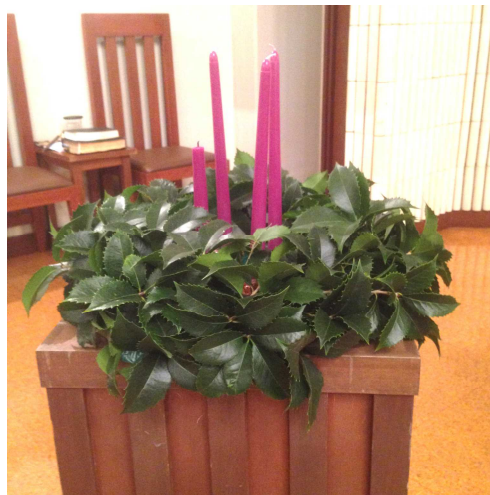
教師、伝道教育部、ヨルダン会（青年会）、聖歌隊などの働きが与えられています。それぞれ教会の大切な働きであり、畏れ多いことです。また、この季節になりますと、クリスマス委員としての奉仕もあります。クリスマス委員はクリスマスの諸集会やいろいろな準備をします。その中でも、リースとクラッツ作りは毎年の恒例行事となつて

います。リース作りについて少しお話しします。



教会の商店街側に柊（ひいらぎ）が植わっています。リースやクラッツに適した枝を切り取り、円い輪になった土台に刺していきます。この土台は、今はもう天に召されました村石幸吉長老がお作りくださったものです。ぶどうか何かのつるを編んで、その隙間に水苔（みずごけ）を満たしてあります。リースを作るときは、この水苔にたっぷり水をふくませて、そこに柊を刺していくのです。商店街に出て柊を切っていると、「こっちの枝も伸びてる」「などとアドバイスをしてくださる通りがかりの方もおられます。柊の葉

には棘があり素手で作業をするとチクチクと痛いので、ゴム手袋を使うようにしています。全体に葉をさし終わると、玄関につるします。全体を整えるために葉をつけ足したりして、最後に赤いリボンをつけて完成です。



同時並行で、クラッツも作ります。つるで編んだ土台に柊をさしていきます。5〜6人がかりで1〜2時間程度かかりますが、クリスマスの出来事を思いながら準備をするのは何とも言えず喜ばしいものです。クリスマスリースの円や緑色は「永遠の命」を表し、リボンの赤は「キリストの血」を表していると言われます。

クリスマスの出来事は、キリストの十字架と復活を抜きにして喜ぶことのできないものであります。どこまでも罪深いこの私のために神の御子がおいで下さった。今年もこのクリスマス喜びを皆様と共に味わうことができますようにお祈りいたします。Ω



「イエス様にサンタのアドレスを  
教えてほしいって言われてもなあ…」



教会ひと「マママンガ」  
《491回目の懺悔》

クリスマスの巻



# 泉ヶ丘教会

## クリスマスのご案内



- 12/10(土)11:30～ こどもクリスマス会
- 12/24(土)19:00～ クリスマスタペの礼拝 説教『救い主誕生の約束』
- 12/25(日)10:30～ クリスマス記念礼拝 説教『イエスと羊飼いたち』  
礼拝後「クリスマスお祝い会」

日本キリスト教団 泉ヶ丘教会  
 〒590-0114 堺市南区横塚台 1-1-5  
 TEL072-291-9532  
<http://www.izumigaokach.com>  
 牧師 松永 政和

